

【研究ノート】

アクティブ・ラーニングの学修効果向上に向けての一考察 (1)

岡田 一範

高田短期大学

Abstract

Now, introduction of active learning is an urgent issue in the current university education. In this research, the author considers active learning and tries to make clear the effects and problems of it. Finally, important factors to implement active learning have become clear. In terms of active learning, the environment for students is much more important than elements for classes.

1. はじめに

昨今、大学教育の場においてアクティブ・ラーニングが注目を浴び、アクティブ（能動的）な要素が導入された授業の積極的な展開が急がれている。しかし、これまでの社会科学系高等教育機関（大学院を除く）における多くの講義においては、基本的には教員から学生への一方向的な知識伝達に重点をおいた教育手法が取られていたといえる。その結果、学生の多くはテストにおいて高得点を取ることや、単位を取得することが学ぶことの目的となっていた。

教員が何を教え、そして学生自身が「何を学んだのか」という意味で「学習」という用語が使われていた。しかし、アクティブな要素が導入された授業での学びにおいて「何を身に付けたのか」という意味で「学修」という用語が使われることが多い。従って、学修という用語の使用にあたり、アクティブ・ラーニング型の授業を展開し、授業効果を高めるために学びの質的転換が図られなければならない。

しかし、「アクティブ・ラーニング」ということばだけが独り歩きをし、授業に意見交換やグループワークを取り入れるだけでは授業効果は高まらない。場合によっては、アクティブな要素を導入したことで効果は低くなる可能性も否定できない。

本研究の目的は、アクティブ・ラーニングの授業を展開することで、学生が自発的に学ぶ姿勢を取ることができるのか、どのようなアクティブ・ラーニングを学生に提供することが「学生のやる気」を引き出す授業展開になるのかを明らかにすることである。

2. アクティブ・ラーニングの概要と導入の背景

文部科学省によるとアクティブ・ラーニングは「教員の一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた授業および学習法の総称。学修者が能動的

に学修することによって、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。」¹となっている。学修者が何を身に付けたのかが重視される授業であり、幅広い包括的な用語であるので、どの専門分野においても共通な定義をすることは難しい。本研究では溝上慎一の「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」²という定義に準拠して展開する。

一言でアクティブ・ラーニングと言っても、様々な要素が存在している。知識の定着・確認を目指す段階や、応用する段階、表現する段階、定着した知識を活用・創造する段階と非常に幅広い。科目によっては長期にわたるプロジェクト学習も必要であるが、短期で見た場合、学生に時間外学習をさせることや、授業内でグループ学習やディスカッション、プレゼンテーションをさせることも必要である。

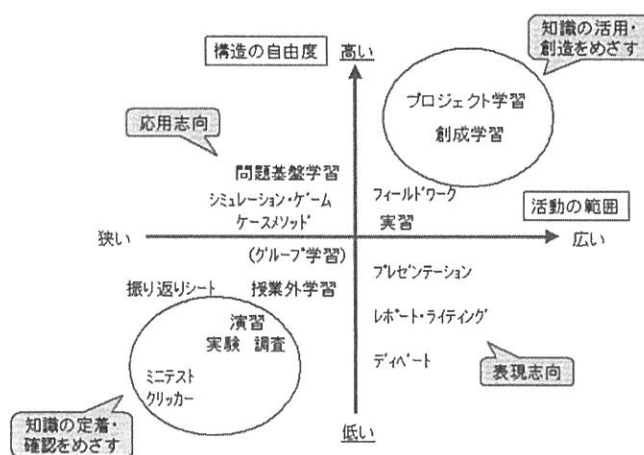


図1 アクティブ・ラーニングの様々な形態

山地 (2009) ³

2008 年の中教審の学士課程答申で学士力が提示され、それを通して、知識理解だけでなく、思考力やコミュニケーションなど技能・態度（能力）までもが、大学教育の学習成果として求められるようになった。その後、2012 年の中教審の質的転換答申のなかでアクティブ・ラーニングがはじめて明示化され、全国多くの大学で一般化して広まった⁴。大学教育の質的転換が求められる背景を学校環境の変化と、産業界が大学に求めるものの変化から考察する。

大学進学率が 50%を超え、大学全入学時代時代を迎えている昨今では基礎学力や学習技能が不十分でも大学の入学が可能となっている。そのような状態で座学中心の講義では学習効果が見込めない。ここで注意しなければならないのは講義科目のような知識伝達型の科目が不要であるということではない。竹内伸一や清水真が指摘するように、アクティブ・ラーニング型授業の実践には受講生である学生のある程度の基礎学力が必要となる⁵⁶。基礎

学力やそれを身に付けさせるための知識伝達型の科目の重要性は今後も色褪せないであろう。しかし、それだけでは今日の社会が求める人材の育成には限界があることも指摘されている⁷。

学校環境の変化からも明らかなように、これまでの大学の主たる役割は、知識を付与した学生を社会に送り出すことだと考えられてきた。大学では理論知識を教えることに焦点を当て、それが実践に活かされる段階は卒業後の実社会が想定されていた。しかし、今日の大学教育ではこのような前提が維持できなくなっている。

大学に求められる役割の指標の一つに経済産業省の「社会人基礎力」が挙げられる。これによると「社会人基礎力」とは、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として①前に踏み出す力（主体性・働きかけ力・実行力）、②考え抜く力（課題発見力・計画力・創造力）、③（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力）の3能力12要素となり、この能力を「地域社会や職場で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義している⁸。社会は即戦力となる新卒者を求めており、このような人材を育成するために高等教育機関において教育方法の再考が必要である。

四年制大学でこのようなことが議論される以前から、短期大学においては理論知識の習得だけでなく、実践力を強化することの必要性が説かれていた。社会が短大卒の学生に求めるニーズや、2年間で社会に送り出すためには実践力の強化が必要だからだと考えられる。

学校環境、社会が求める力などが変化してきた中で、それに対応する技術、能力を育成する教育方法としてアクティブ・ラーニングが生まれてきたと考えてもよいだろう。

3. アクティブ・ラーニングの実践例

先述したようにアクティブ・ラーニングには様々な要素がある。全ての要素を一つの科目で実践することは困難である。自らが担当する科目はどの要素がふさわしいのかを見極めなければならない。

筆者が所属する高田短期大学キャリア育成学科オフィスワークコースの定員は60人であり、決して大きな大学ではない。少人数であることを活かして講義科目も演習科目も学生の反応や雰囲気を見ながら進めやすいことや、グループワークなどを行いやすい環境にある。筆者は講義科目においても演習科目においても、授業進度を確認する意味合いも含め、学生に多くの問いかけをしながら講義を進めることや、確認小テストの実施、ディスカッションやグループワークなどを多く取り入れてきた。決してアクティブ・ラーニングを意識していたわけではない。短期大学に在学する学生にとって、効果があると考えていたから実践してきた。そのように考えると、従来から多くの教育者が意識する、しないに関わらずアクティブな内容を取り入れた授業が展開されていたと考えられる。

筆者が担当している2年生後期の科目に「流通論」がある。平成26年度から開講されており、3年間学修効果向上に向けて様々な取り組みをしてきた。

平成26年度はパワーポイント資料を配布し、重要箇所は空欄にし、そこを学生が埋めていくことと、学生に多く問いかけをしながらの授業展開を実践した。学生は重要箇所を書くことで覚え、残りの時間は集中して聞くことができ、問いかけが多いので、考える時間もあつた。このような授業に対して、学生からの自由記述による主な評価は以下のようである。

- ・プリントが穴あきとなっていたので、重要箇所が理解しやすかった。
- ・問いかけながら授業を展開してくれたので、聞いたり考えたりする時間があつて良かった。

学生に問いかけをしながら授業を展開することは、学生も授業に集中するという点で効果があると感じている。その一方で、重要箇所のみを書くのでは、教員が主導となり重要箇所を提示していることになり、学生が自ら重要箇所を探すことや、話の前後関係やつながりを理解することは難しい。

平成26年度の反省事項として問いかけをしながらの授業展開は学生が聞く、考えるという点では効果がある。しかし、それでは学生が自ら積極的に授業に参加しているとは考えられず、授業効果は高められていない。自らが学ぶ姿勢をとり、話の前後関係などを理解できるような授業展開ができていないことが課題として残った。

平成27年度は前年度の反省を活かして、書く力、まとめる力の向上を目的に「予習ノート」を導入した。これは時間外学習として次回の講義内容をまとめるように指示をした。同時にプリントの配布もしなくなった⁹。予習ノートの作成方法や作成枚数は自主的な学習の観点から指定しなかった。予習ノートを作成することで、事前に講義内容や流れをある程度理解することや、重要箇所を自ら探し出そうとすることができる。その状態で受講することで、理解度は向上すると考えた。平成27年度の学生からの自由記述による主な評価は以下のようである。

- ・前もって授業内容を理解しておくことで、授業にスムーズに入れた。
- ・パワーポイントが配布されないが、必要な箇所はどこかを考えながら書くので、要点を抜き出せるようになった。
- ・予習ノートと授業のノートを見比べて、自分が考える重要点が合っていたときは嬉しかった。
- ・書く量が多くて大変だったが、書く力、まとめる力は付いたと思う。

など、時間外学習を充実させたことで、学生の授業効果は高まっていると考えられる。繰り返すにはなるが、それは自ら学ぶ姿勢を取れ始めているからではないか。

平成28年¹⁰は前年度から導入している予習ノートに加え、授業開始時に10分程度、前回の復習、本講義の目的、重要箇所、本講義とこれまでの繋がりなどを学生に明示することを実践している。これは学生にも聴く姿勢の変化を求めることを目的としたからである。つま

り「聴く」という姿勢を求めたのである。一方的な授業では学生が「聞く」状態であることは往々にしてある。しかし、教員が学生を「聴く」姿勢に導けるように、先述したようなものを明示し、これまでの知識や経験とすり合わせて、新しい知識を習得したり、物事のつながりを思考したり、疑問を抱いたりできるようにした。このようにして授業を進めているが、学生をスムーズに授業に導くためにも、聴くためのポイントは前もって示すべきだと考える。つまり、教員が学生を能動的な学習に導けるように何らかのアクションを起こし、学ぼうとする意識付けをすることや、学ぼうと行動を起こす環境を提供することが重要である。

4. おわりに

アクティブ・ラーニングの導入となると、授業の形をどうするのかに主眼が行きがちである。筆者も最初はそうであった。つまり、時間外学習をさせたり、問いかけ式の授業を展開したり、授業にグループワークを導入したり、授業の最後にコメントを記入させるなど、どのようにしてアクティブ・ラーニングの授業を展開するかを考えていたのである。これらの要素が組み込まれた授業は、傍から見ればアクティブ・ラーニングの授業展開をしているように思える。

しかし、研究や授業を実践していくうちに、授業にどのアクティブ・ラーニングの要素を組み込んで展開するのかという、授業の形よりも、学生が受講するにあたり、積極的に学ぶための意識付けをすること、学ぼうとする環境を教員が提供することの重要性に気がついた。その環境を提供する方法にアクティブ・ラーニングによる授業展開が求められるのではないか。

平成 26 年から 3 年間、このような取組を行ってきたが、授業内で行う記述式の小テストや定期考査の結果を見ると、平成 26 年度より、平成 27 年度、今年度の方が平均点は上がってきている。また、グループワークをして報告させる場合も、報告内容の質が向上しているように感じる。時間外学習で予習させ重要箇所を探すことで、読む力、書く力、まとめる力が向上しているからではないか。また、授業を受身で聞くのではなく、教員側から聴く姿勢に持っていけるように重要事項を明示することで、前後関係のつながりなどを意識できるようになったからだと考える。

しかし、今回の研究をもって、アクティブ・ラーニングを実施することで学修効果の向上が見込め、自らやる気を出して学ぶようになると結論付けるのはまだ早いといえる。ただ、学生の評価からも明らかなように、自ら学ぶ姿勢をとるようになれば、学生自身が成長することは明らかである。従って今後はどのようなアクティブ・ラーニングの要素が学生に効果があるのかを検証していかなければならない。現在、筆者が行っている授業のアクティブ・ラーニングの要素を細かく分類し、学生へのアンケートを実施したいと考える。つまり、現時点では筆者が行ったことについて自由記述の中で効果を感じているだけで、エビデンス

が不十分であり、客観的に学修効果を可視化できていないことが課題である。この件については今後の研究課題としておきたい。

またもう一つの研究課題も生まれてきた。基礎学力が付き、興味を持つことで、自ら学ぶことの意味合い、楽しさを学生が考えるようにすることをアクティブ・ラーニングの授業で展開することは可能なのだろうか。基礎学力の向上は、読む、書くことを徹底することで可能になると考えるが、明確な方法についてはまだ見いだせていないので今後の研究課題としたい。

これらの課題を検証しながら、学修効果が向上する授業とはどのようなものなのかを研究し、実践していきたい。

注)

¹ 文部科学省. (2012). 『質的転換答申』

² 溝上慎一. (2014). 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂、7 頁

³ 山地弘起. (2009). 『アクティブ・ラーニングの実質化に向けて』 大学教育機能開発センター

⁴ 溝上慎一、前掲書、i 頁

⁵ 高木晴夫監修 竹内伸一著. (2010). 『ケースメソッド教授法入門 理論・技法・演習・ココロ』 慶応塾大学出版社、15-17 頁

⁶ 清水真. (2010). 「マーケティング論II」の講義における PBL 導入の試みと成果『日本産業科学学会研究論叢』第 15 号、53 頁

⁷ 高木晴夫監修 竹内伸一著、前掲書、15-16 頁

⁸ 経済産業省. (2006). 『社会人基礎力に関する研究会』(中間とりまとめ)

⁹ プrintの配布はしなくなったが、写真など必要な資料に関しては参考資料として学生に配布した。

¹⁰ 平成 28 年については、現在授業の最中であるので、学生からの評価の声はまだない。

参考文献

市坪誠編著. (2016). 『授業力アップ アクティブ・ラーニング』 東京：実教出版

河合塾著. (2013). 『「深い学び」につながるアクティブラーニング』 東京：東信堂

文部科学省著. (2014). 『大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック』 東京：リベルタス・クレオ

山本崇雄. (2016). 『なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか』 東京：日経 BP 社